

ブラジル特報

Notícias e Informações

No. 1619

2014年3月号



カピバリベ川対岸からみたレシーフェ旧市街
写真提供：岸和田 仁『ブラジル特報』編集委員

ÍNDICE／目次

ペルナンブコ州の現状と展望 2
—新しい波の到来か—
関口 ひとみ

忘れられた日本移民史のページを紐解く 4
—サンパウロ「真実委員会」の証言と謝罪—
深沢 正雪

●社会・文化 6
日本に住む日系ブラジル人が抱える
就労・高齢化・精神疾患問題
林 隆春

最近のブラジル政治経済事情 8
—外務省中南米局提供情報その他より

●日系企業シリーズ 9
日本特殊陶業（NGK スパークプラグ）
ブラジル事業 55 周年
加藤 三紀彦

●文化評論 10
ヴィニシウス・デ・モラエスの
料理レシピ本を味読する
岸和田 仁

●エッセイ 11
ブラジルの成長痛、サッカーを超える国に
宮本 英威

イベント・新刊書紹介 12

発行：一般社団法人日本ブラジル中央協会

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-1-15 物産ビル別館 1 階 電話 03-3504-3866 FAX 03-3597-8008

発行人：大前孝雄 編集人：桜井敏浩

URL : <http://nipo-brasil.org/> E-mail : info@nipo-brasil.org/

頒布価：700 円

ペルナンブコ州の現状と展望 —新しい波の到来か—

関口 ひとみ

(在ブラジル大使館一等書記官兼在レシフェ出張駐在官事務所長)

はじめに

ブラジルは、堅実な経済政策を柱に据え、GDP 世界 7 位の経済大国にまで成長し、中南米諸国のリーダー的な存在を強固なものとなりました。今年は、世界最大のサッカーイベントであるワールドカップの開催により、海外からの熱い視線がブラジルに集まっています。ここで御紹介するペルナンブコ州でも日本戦を含む 5 試合が予定されています。町では、大会成功のため東北ブラジルの底力を見せよう、という意気込みが伝わってきます。ペルナンブコ州の人々は、サトウキビ産業を中心に培われた伝統や古いしきたりを重んじながら、いち早く IT 産業に着目し、インターネットの普及率は全国でも上位にあります。海岸沿いには高層マンションやインテリジェントビルが建ち並び、高級輸入車が駆け回っています。一方で、内陸は干魃に喘ぎ、幼い子供までがサトウキビの収穫に駆り出され、勉強も満足にできない現状が残っています。ブラジル政府のボルサ・ファミリア（低所得者家族向け手当）の受給率が高い貧困地域であることも事実です。

ペルナンブコ州は、オランダに侵攻され、反乱と革命運動を繰り返してきました。サトウキビ栽培地帯における労使間の対立や、度重なる干魃に無策のまま取り残された半乾燥地帯の農民によって組織される野盗団（カンガセイロと呼ばれ、今ではヒーローとして語り継がれている）が跋扈する時代が続きました。ブラジルの発展の波に乗れずにいた同州では、スアッペ工業港の開港に続き、州税恩典による工業誘致で、国内外から多くの企業が生産拠点を構えるようになりました。

南東ブラジルから技術者や労働者が大挙してレシフェ大都市圏へ転住するため、不動産相場が高騰、テナントビルや高層マンションの建設ラッシュも起きています。サービス業や IT 事業も拡張が続き、州民の購買力は上昇傾向にあり、ペルナンブコ州を含む東北ブラジルを離発着する空の便は常に満席で、観光とビジネスを目的とした国内外からの旅行者を多く見かけます。

“ORGULHO DE SER NORDESTINO”（東北人としての誇り）をプリントしたシャツを着ている人を見かけることがあります。この背景には、東北ブラジルを軽視する者を見返すため、東北ブラジルには如何なる苦難にもめげないパワーがあることを表すためだそうです。よそ者には疑い深く、心から打ち解けるまでに少し時間がかかりますが、目が合えば笑顔で挨拶をしてくれます。店員の愛想も良いです。とりわけ東洋系が珍しいのか、良く話しかけられます。観光名所で見学旅行の児童生徒に見つかり、日本人だと分かった瞬間、日本の文化が大



レシフェ市（ペルナンブコ州政府提供）

好きだと人なつっこく寄ってきます。ただ、最近では中国や韓国系の住民の増加で、「日本人か？」と聞かれるより、「中国人か？」が多くなり、寂しい思いもします。

発展にともなう代償もあります。交通渋滞は大都市並に深刻で、車の登録台数は増加し続け、交通マナーは悪いのが常です。治安の悪化や格差問題も依然大きな課題です。カンボス・ペルナンブコ州知事は、就任以来、治安改善を目標とし、Pacto pela Vida（命のための協定）に取り組み、インフラの整備や警察官の増員等改善を図っています。この政策が試されるのが 6 月のワールドカップだとされています。州政府は威信をかけて、試合観戦者や当地訪問者の安全に取り組むことを宣言しています。

ペルナンブコ州沿革

ペルナンブコの由来は、原住民のトゥピ語で“paraná”（大きな川または海）と“buka”（穴）が合体し、海が岩礁によって大きな穴ができる様子を表現したこと、また“paranâbuku”（長い川）を意味し、ペルナンブコ州を横断する現在のカピバリベ川を指しているのではないかと、という諸説が有力視されています。

1534 年にドゥアルテ・コエリョがポルトガル王室からペルナンブコ領を拝領してからサトウキビ栽培を中心とする植民・開拓が始まり、砂糖産業は長年ペルナンブコ州の経済を支えていましたが、勢いがなくなり、改善の兆しが無いまま 20 世紀に入ります。しかし、近年は、スアッペ工業団地の整備にともない、ペルナンブコ州の開発が再スタートし、経済が潤っています。

IBGE（ブラジル地理統計院）を見ると、2002 年から 12 年の間にクラス C 人口は 22% から 42% に増加し、ペルナンブコ州をはじめ東北ブラジルの消費市場は全国をリードする高い成長が見込まれています。中央政府もこの勢

いを後押ししようと、南東部に次いでインフラ投資を集中しており、官需も高まっています。

この経済成長を牽引している要因に、レシフェ市より南50kmに天然の良港を有するスアッペ工業団地があり、ここには南半球最大の造船所があります。これまで技術提供を行ってきた日本のIHIが、2013年6月、同造船所への出資に加わりました。この他にも産業は活気づいており、フィアット社が80億レアルを投資し、ブラジル国内では2番目の自社工場を建設中で、年間25万台の生産を見込んでいます。

内陸の農業地帯では花卉栽培が盛んで、サンフランシスコ河渓谷流域地帯のペトロリナ（ペルナンブコ州）およびジュアゼイロ（バイア州）周辺の灌漑地域では、ブラジル国内最大の輸出量を誇る葡萄およびマンゴーやアセロラの生産があります。この地域は、新しいフロンティアに属する日系再移住地として開発され、マンゴーは、バイア州に次いで2位の生産量を有し、主にヨーロッパとアメリカに輸出されています。ペトロリナには本邦ニチレイ社の現地食品会社「ニアグロ」がジュース用の果実パルプ（主にアセロラ）製造工場を有し、日本およびヨーロッパに輸出しています。

ブラジルでは専門知識を有する技術者や熟練労働者の不足により、人材育成は急務とされています。ペルナンブコ連邦大学は、現政権の政策であるCiência sem Fronteiras（「国境なき科学」計画：ブラジル人理系学生・研究者10万人を政府の予算で留学させる計画）を活用し、学生を日本へ留学させています。とりわけ海洋造船分野の強化のため、東京大学や横浜国立大学との間で学術交流を締結するとともに、造船分野の学生を本邦造船所で研修させるなど、積極的に人材育成へ取り組んでいます。

ペルナンブコ州の観光と文化

ペルナンブコ州は、南北187kmに渡る海岸を有し、国内有数の観光地です。レシフェ旧市街とオリンダは、ユネスコ世界文化遺産に、レシフェ市から北東へ約545kmの大西洋に位置するフェルナンド・ジ・ノローニャ諸島は、世界自然遺産に指定されています。ポルトガルの植民地時代をしのばせる多数の寺院や史跡に富み、砂州と島の上に建設されたため市中を運河が流れ、「ブラジルのベニス」と称されています。

カーニバルは特筆に値し、リオデジャネイロ、サルバドルと並び、100万人以上が集まる“Galo da Madrugada”（夜明けの鶏）は、世界最大としてギネスブックに登録されています。また、無形文化遺産の“frevo”は、多くの観光客を魅了しています。ほかにも“maracatu”やブラジル各地に広がっている音楽“forró”なども東北ブラジル独自の文化を育んできました。

2014年のペルナンブコ州

2014年は、ペルナンブコ州にとって特別な年になりそうです。一つには、ワールドカップの舞台となるからです。会場のArena Pernambucoでは、昨年のコンフェデレーションズカップで、日本・イタリア戦が開催されました。観戦者の多くが日本を応援し、まるでスタジアムがサムラ



SUAPE 港（Camargo Correa 提供）



Arena Pernambuco（筆者撮影）

イブルー一色に染まったように感じました。会場がレシフェ市内から約19km離れているため、観客の輸送が大きな課題であるとともに、治安はペルナンブコ州政府の最大懸念です。大規模デモ等が今年も想定されることから、ブラジルは万全の対策で臨むとしています。

日本戦は6月14日ですが、試合観戦を予定される方は、スタジアムへのアクセスを含む交通情報等の現地事情について、在外公館のホームページ等を事前に確認されるとともに、必要に応じて更新される情報にご留意頂くことをお願いします。

もう一つの注目は今年の大統領選挙です。エドゥアルド・カンボス州知事（PSB—ブラジル社会党 全国総裁）は出馬に向け活動中です。同知事は、左派リーダーであったミゲル・アラエス元ペルナンブコ州知事の孫。民間の経営モデルを参考にした州行政組織の再編を行い、高く評価されています。2013年の世論調査では、アマゾナス州知事に次いで2位の支持率（58%）を得ています。マリナ・シルバ元環境大臣がPSBに移籍したことから、カンボス候補の副大統領となった場合、その得票率が追い風となる可能性もあり、今後の大統領選の行方が注目されています。

ペルナンブコ州は、長年砂糖に依存してきましたが、造船、自動車、IT産業に転嫁し、東北ブラジルの再建に大きな役割を担っています。観光と産業の両輪で持続可能な経済発展および治安の改善により、戦略的な州へと躍進することを期待したいと思います。

（本稿は筆者の個人的見解で、外務省を代表するものではありません。）

忘れられた日本移民史のページを紐解く

サンパウロ「真実委員会」の証言と謝罪

深沢 正雪
(ニッケイ新聞編集長)

民主化後のブラジルにとって、軍政時代に発生した人権侵害の取り扱いが懸案事項となってきた。中でも自らが逮捕され拷問を受けた経験を有するルセーフ現大統領は2012年5月に「真実委員会」を立ち上げ、サンパウロなど主要州に設置した小委員会において審議が重ねられてきている。その関連で、第二次世界大戦中および戦後の日系人に対する人種差別的な取り扱いがサンパウロ小委員会の公聴会で取り上げられ謝罪に至る展開となっている。本件を現地で取材してきたニッケイ新聞の深沢正雪編集長に経緯と背景を寄稿していただいた。(編集部)

モラエス著作への反発

「日本移民の死と拷問」問題を真実委員会に働きかけてきたのは映像メディア会社『Imagens do Japão』(IMJ)の共同経営者、奥原マリオ純(39歳、三世)だ。彼が2012年暮れに公開した勝ち負け抗争を描いたドキュメンタリー映画『闇の一日』を製作する過程で、日の丸を踏まなかっただけで政治警察の拷問を受け、「監獄島、アンシェッタ送りにされた日本移民が多数いることを知り、この運動を思い立った。

そもそも奥原が勝ち負け抗争に興味を持ち始めたキッカケは、2000年にフェルナンド・モラエスが発表した著書『コラソンエス・スージョス』(ポルトガル語、コンパニア・ダス・レトラス出版)だった。そこから13年がかりで撮影したのが『闇の一日』だった。

モラエスの著作以前、多くの二、三世にとって同抗争はまったく未知の出来事だった。モラエス著作は史実に基づいているが、多分に読み物的に脚色しており、「臣道聯盟＝テロリスト」という当時のポ語紙の誤解を膨らませた論調が強い。同著作をさらに「活劇、風に仕立てたのが、2012年に日本、ブラジルで公開された同名映画(邦題『汚れた心』)といえる。

このような誇張した解釈や方向性に対して、日系人側からの反発心が生まれていた。その一人はエスタード・デ・サンパウロ紙論説委員をする二世、保久原ジョルジだ。父が臣道聯盟の会員だったことから、モラエスが同組織をまるでテロ集団のように描いたことに反発を覚え、自分が父親から聞いた話を軸に日系人側の視点による家族史として『O Sudito (Banzai, Massateru) (臣民一万歳、正輝)』(ポ語、2006年、テルセイロ・ノーマ出版社)を著した。

多くの戦前一世にとって終戦直後のドタバタは心理的なトラウマになっており、今も禁句という雰囲気が強い。



真実委員会のサンパウロ州小委員会「日本移民の死と拷問」公聴会の様子。左から2人目がジョーゴ州議、カルドーゾ弁護士、奥原、日高。 出典:CVESP(「真実委員会」サンパウロ小委員会)

まして積極的に子孫に伝えるべき内容とはいえない事柄だった。同抗争を語ることがタブーになった余波で、ヴァルガス独裁政権中、特に戦中の日本移民への差別や迫害という部分までもが移民史からぼかされてきた。戦中の日本人迫害に関しては移民70年史、80年史、100年史にも詳しくは扱われていない。ヴァルガスから発刊停止処分を受けた歴史を持つ邦字紙も、反政府的な活動を自粛する方向性を強く持ち、意識的にそれに加担して来た部分がある。

奥原は「勝ち負け抗争は調査のキッカケに過ぎない。今、僕の関心の中心はヴァルガス独裁政権時代の人権問題、日本移民迫害だ。それがあったから勝ち負けは起きた。戦争中に日本移民に起きたことを、ブラジルの歴史としてはっきりさせ、二度とあのようなことが起きないように注意喚起するのが目的。そのためにはヴァルガス時代のことをもっと表に出さないといけない。だから真実委員会に持ちこんだ」と説明する。

モラエスの著作はまさに日系人の心の「パンドラの箱」を開けた。

学術界でも人権侵害調査

モラエス著作が起爆剤となり、日本移民百周年の機運がこの方向性に油を注いだ形になった。2008年4月に出版されたUSP(サンパウロ大学)の日系研究者タケウチ・ユミ・マルシア著『O Perigo Amarelo(黄禍論)』(ウマニタス出版)により、ヴァルガス独裁政権から戦時中にかけての日本移民と子孫への差別的な抑圧に関する研究が発表され、学術界においても注目を浴び始めた。

機を同じくして08年4月20日付けフォーリャ・デ・

サンパウロ紙は、ジャーナリストのマチナス・スズキ JR. による日本移民への人種差別を振り返る記事 (<http://www1.folha.uol.com.br/fsp/mais/fs2004200804.htm>) を掲載した。移民百周年は歴史をいろいろな角度から振り返る機会だった。

これらに触発され、リオデジャネイロ州立大学ブラジル日本文化研究所によりドキュメンタリー映画『Perigo Amarelo - o lado B da imigração japonesa (黄禍論 - 日本移民の裏面)』(2011 年、デビジ・リアル、マウロ・ジル監督、50 分) を制作した。二世のアリタ・マサルの証言を映し、リオデジャネイロで戦時中に差別された経験から「我々は日本人の子供だが、ブラジルで生まれたブラジル人だ。この国でこのようなことが二度とあってはいけない」という血のにじむような証言を引き出した。

同映画の最終部ではゼリア・ブリット・デモルチニ USP 教授が「ブラジル政府は戦争中の日本人差別に関して一度も謝罪したことはない。おそらく最も謝罪的な行為であったのは、日本移民百周年の機会に実に積極的な協力をしたことではないか。政府だけでなく、国民全体がそれを意識していたかのように思えた」と語っている。

これらに共通しているのは、日系社会のコンセンサスを受けて運動として広がるのではなく、ほぼ同時多発的に独自に動いている点だ。

奥原の孤独な働きかけ

ルセーフ大統領の肝いりで始まった「真実委員会」下部組織、サンパウロ州小委員会のアドリアノ・ジョーゴ委員長(州議、PT 労働者党)と奥原は何度も打ち合わせをして議題として取り上げるように働きかけてきた。同委員会が設定する調査範囲は 1946 年から 88 年だが、軍事独裁政権による被害事件が中心だった。奥原は、勝ち負けが起きた原因はヴァルガス独裁政権の人権侵害であり、その続きとして終戦直後の不当な日本移民取締りが行われた訳だから、これも対象になりえる一と考えた。

まず同小委員会で『闇の一日』試写会、日高德一の非公式公聴会を行った。真実委員会は PT 系の人物が中心になっているため、右派や中道派政党に多い日系議員は協力を申し出ることはなかった。日系政治家から議員割り当て金などで支援して貰っているブラジル日本文化福祉協会や移民史料館関係者からも距離をおかれる状態だった。「あまりに委員会の腰が重いので 9 月に諦めようかとさえ思った」と振り返る。

でもジョーゴ委員長は「正式な公聴会を開くべきだ」と決断し、奥原が真実委員会元委員長のローザ・カルドーゾ弁護士と話す機会を作った。同弁護士は奥原の話に強く感銘を受け、サンパウロ州小委員会がこの件に関する公聴会を行うことを許可し、特別に自ら出席することを決めた。

真実委員会としての謝罪

「真実委員会の名において日系コロニアに謝罪する」－サンパウロ州小委員会は同州議会で、昨年 10 月 10 日午後、

「日本移民の死と拷問」に関する公聴会を行い、連邦レベルの同委員会メンバーのカルドーゾ弁護士は特別にリオから出席して、そう謝罪した。

当日は 3 人が証言した。何の罪もなくアンシエタ島に流された故山内房俊の息子、山内アキラの証言映像が流され、「獄中のことを証言するよう父に何度も言ったが、話したがらなかった。日本人が嫌いな軍曹に拷問や酷い扱いを受けたと父は言っていた」と話した。カンバラ・シズコは、1946 年に警察の拷問で亡くなったとされる写真家・池田フクオの投獄の様子を証言した。日高德一＝マリリア在住＝は、当時日本移民が受けた違法投獄、拷問などの不当な扱いについて証言した。

カルドーゾ弁護士は「かつてのブラジル人エリートは常に人種差別者だった。ブラジルが発見された当時、下等民族とみなされたインディオが大量虐殺され、黒人は動物、商品として非人間的な扱いを受け、その次は移民、特にアジア系移民が標的にされた。戦争中にその差別が顕著になった」と認め、謝罪した。

2 時間余りの公聴会には約 150 人が出席した。奥原は「普通の公聴会では証言を聞いておしまい。今回のように両国歌斉唱をし、戦中を映像で振り返り、日本語の歌を入れ、儀仗兵に追悼ラッパを吹かせて、献花するというのは異例中の異例。ジョーゴ議員がすべて差配してくれた」と深く感謝する。

政府に近い筋が、日本移民への人種差別を初めて正式に認めて謝罪したものであり、ブラジル近代史においてもインディオ、黒人以外にも人種差別があったことを認めたという意味で歴史的な発言といえる。

父の想い胸に次は法務省へ

IMJ 社は 1970 年 10 月から日系人初のテレビ番組を始めた伝統ある会社で、奥原康永(兄)と奥原マリオ清政(弟)が共同経営していた。芸能人招聘事業を頻繁に行い、同年 8 月には美空ひばり公演まで成功させた。清政の息子、奥原マリオは真実委員会に今件を持ち込んだ理由を、「父がブラジルに渡ったのは 1937 年。まさにヴァルガスの新国家体制が始まった年だった。当時、父の家族はアラサツバに住んでいたが、日本移民への暴行、犯罪はひどいものだったと何度も父から聞いた。本来なら、父は自分のテレビ番組の中でそのことに触れたかったが現実には不可能だった。だって当時は軍事政権の時代だから」と説明する。

「父はいつもブラジル政府は日本人に謝るべきだと言っていた。このような残酷な歴史が繰り返されないようにするためには、まず公式な組織が歴史的な事実として取り上げ、そこで認められることが必要だと思った」。真実委員会への働きかけはこれで終わりだという。奥原は「今回の謝罪はあくまで委員会としてのもの。政府の正式謝罪まで持って行きたい。大統領もしくは連邦議会だ。だから次はこの件を法務省に持ち込むつもりだ」と語った。(文中敬称略)

日本に住む日系ブラジル人が抱える 就労・高齢化・精神疾患問題

林 隆春

(株式会社アバンセコーポレーション 代表取締役)

出稼ぎビジネスが天職 だと思った初めのころ

私が最初にブラジルを訪問したのは1985年、ブラジルが軍政から民政に移行したまさにその時で、凄まじいインフレの渦中、日系社会はブラジルの政治・経済に翻弄され、生き方の羅針盤を見失っていました。

「クルザードで働いても生活の安定が得られないなら、安定した円を稼いで生活を立て直そうよ」と、86年から始まった私の出稼ぎビジネス。一時期、私は舞い上がって天職とまで思い、90年のバブルに向け猛進する日本に日系ブラジル人を送り続けました。

そして現在までに6万人近くの雇用実績があります。歯医者、弁護士、農家・牧場主、学校の先生、銀行員、実にたくさんの人が来日、そして数年を経て帰国、人生を再出発、多くの人たちの幸せストーリーに微力ながらお手伝い出来たという実感はありますが、それが日系社会の不幸の始まりであることを当時の私は微塵も考えていませんでした。

雇用の階層化がもたらしたもの

1991年にバブルがはじけ、景気の閉塞感が蔓延する1995年、当時の日経連は労働者を「長期蓄積能力活用型」「高度専門能力活用型」「雇用柔軟型」と三つに分ける「新時代の『日本的経営』」を提言、人件費の圧縮や人件費を売上高と連動、同時に雇用の階層化を推し進めました。階層化の重要なツールである労働者派遣法も対象職種が拡大、期間も長期化、1997年のアジア通貨危機以降、政治は経済を全面的に後押し、1999年の派遣法改正で一部の禁止職種以外は全て派遣可能となりました。そして2000年のITバブル崩壊です。これを契機に企業は目覚め、より一層雇用の階層化に邁進していくこととなります。

企業にとっての「正しさ」は、2008年に証明されました。リーマンショック時、派遣社員や非正規労働者の雇用は激減しましたが、社員の雇用は守ることができ、多くの企業は人事政策上は成功だったと考えています。

しかし、従業員寮に入り自分の家の無い人、職業訓練を受けずスキルの低い人、外国人等言葉の弱い人、賃金が安く溜めの無い人が解雇され、立場の弱い人達がより一層弱くされ、企業が守り育てる機能を放棄し、その結果、日系人社会が未来を描けず利根的な暮らしに埋没、メンターの人が消え、コミュニティが劣化していきましました。

労働者派遣法は運用を市場原理に委ねることで暴走を

許し、格差を広げ、階層を固定化、捨て去る人達をつくり出すルールになったのです。

しわ寄せを受ける日系ブラジル人

日系人の人たちに仕事はどうかと聞くと、「アルバイトをしている」と答える人が多い。以前だと、「〇〇会社で働いている」と答える人が多かったが、この4年あまりで一気に雇用の底が浅くなったことを実感します。働いても働いてもギリギリの生活を強いられ、現状で精一杯、病気等アクシデントがあれば仕事がなくなり、家族は生活の基盤を失う。日系人家族は薄氷を踏むような不安定な心持ちで毎日を過ごし、次世代の子供達にも影響が出始めています。

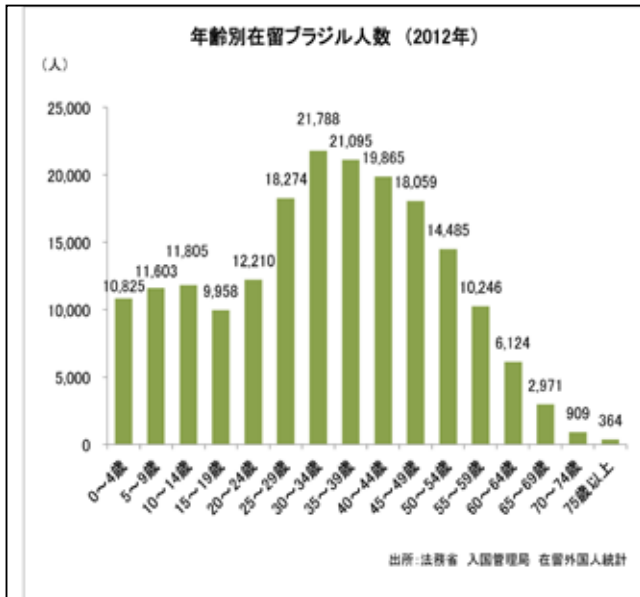
リーマンショック時、我々派遣会社と闘った合同労働組合（非正規ユニオン）も、東日本大震災後には解雇ともいわず、「仕事が出てきたらまたおいで」で済まされ、一部のユニオンでは「解雇してくれ闘争」まで始めています。現在ブラジル日系人はブラジル人口の約1%程度ですが、サンパウロ大学は全学生の約10%が日系人です。他の国立大学も同じような状況なのに、先日面接した日本に住む日系ブラジル人男性は32歳で、16歳の時に来日、ブラジルでもあまり教育を受けていない。これからどうするのと聞くとキョトンとしていました。

生活保護を受給している人に基金訓練を勧めても「もらえるお金が変わらないから生活保護でいい」という人が多い。ブラジルに住む日系人有識者のみなさんは、「我々は頑張った。日本に来てなぜもっと頑張らないんだ」と自己責任で片づけようとするが、何か違うのです。あくせく頑張っても自分たちに将来は無いと感じ、働く意味・意義が見出せず、だんだんと苦しく感じるようになる。彼らではなく、我々日本人の心の奥底に彼らを受入れない何かがあり、それを彼らが感じ取って心が冷えていったのかもしれない。

なぜUR都市機構の賃貸住宅をはじめとした集合住宅に日系人が住むのか。それは、連帯保証人を必要としないからです。就職にも、入院にも、手術にも、日本では多くが連帯保証人を、それも日本人の保証人、身元引受人を当たり前のように要求します。

中学校を卒業した子が相談に来ます。就職か進学の相談をする相手がおらず、自然に学校から排出されていく子供達。不登校になっても彼らは義務教育ではないので、先生が自宅訪問をしたり、親を指導したり、警察が補導する事もあります。ましてや、障害のある子を支える「外国人向け児童デイサービス」など聞いたこともない。現在、私

年齢別ブラジル人人数



達三重県四日市市でその施設を運営しており、豊田市、浜松市等の支援団体からその活動を広げてほしいと要請はありますが、補助、助成金の無い現状を考えると、今の1施設が精一杯で、もう一歩踏み込めない現状です。

私達はフードバンクで食の支援もしていますが、食料を受け取りに来たブラジル人の母子は、ご主人が派遣切りで失業した後失踪し、家賃の支払いも出来ず、電気、ガス、水道も止められ、追いつめられた結果、「ミルクを頂けませんか」と相談に来ました。民生委員も、地域社会も、保健所も誰の目にもとまらず、毎日命をひたすらつなぎ、ようやく私達の元にたどり着いた人達。しかし、たどり着かない見えない人達は、その何十倍もいることでしょう。

派遣から正規社員に移行するには職業訓練が必要ですが、私の住む外国人人口20万人の愛知県で、21校ある職業訓練校への外国人入校者はほぼゼロ、日系人に使った一番大きな予算は、「目の前からいなくなって政策」といわんばかりの帰国者支援費、日系人は血のつながった同胞ではなく、招かれざる客だと実感しました。今後は日系人自身も心の折り合いをつけていかざるを得ませんが、急速に弱体化したコミュニティのダメージは末永く残るでしょう。

日系社会の高齢化と精神疾患問題

数ヶ月前、末期ガンの日系ブラジル人男性が日本を発ち帰国しました。彼に帰国の意思はありませんでしたが、認知症や幻覚症状、日本との縁の薄さ、老人ホームの費用負担、異国での適応力を考えると、無理を承知で帰国させざるを得ませんでした。生活保護費から旅費の負担はありません。昨年、身体が弱り働けなくなった日系ブラジル人が、生活保護受給申請の数ヶ月後に孤独死、変わり果てた姿で発見されました。

私は、無償で数多くの保証人をしていますが、日系社会の高齢化は喫緊の問題です。日本人は年間で人口の約1%が死亡しますが、一世・二重国籍・帰化の人を合わせた20数万人の日系ブラジル人も55～59歳が10,246人、

毎年約2,000人が60歳になり、50～54歳は14,485人、5年後は毎年2,500人あまりが60歳を超え、日本に住む日系社会の高齢化が急速に進むものと思われます。

A県の国際センターに相談のため来所した日系ブラジル人で精神疾患が疑われる人は、2010年4月から10月までの7ヶ月間で704人、うち19歳以下の子供達が50%超を占めています。国際センターに来所する人はほんの一部で、実数はこの10～20倍はあるものと思われます。日本全体として考えると、空恐ろしい数字になります。

ブラジル・サンパウロのサンタ・クルース日伯慈善病院は、別名日本病院とも呼ばれ、1908年の笠戸丸初移民から約30年後の39年、在日日本人同仁会によって設立されていますが、まさに日本も85年から30年を経過して、高齢化、永住化後の施策が求められています。

日系人と一緒に考える派遣会社へ

私は、さまざまな外国人支援活動を贖罪や懺悔の思いで行っています。リーマンショック後、この仕事をやめようと思ったこともあります。私が会社を清算して日系社会が良くなるならそれでも良いですが、現状はそうではありません。

この数年で、私達がこの業界に残って改革してほしいと願う将来を嘱望される若手経営者が派遣業界から消えていきました。若い優秀な経営者は、社会や家族、友人等の賞賛があつてがんばれます。金さえあればどんなことを言われても耐えられる人しか残らない業界が、働く人の未来と一緒に考え、働く人の幸せを願えるでしょうか。派遣が無くなれば企業は直接雇用に向かうと考えるのは、あまりに安易過ぎないでしょうか。

企業はコストは管理したいが、コンプライアンスには関わりたくない。社会保険に入らせず共済組合を自前でつくり、年金等は棚上げ、メーカーも直接雇用と称して採用管理やコンプライアンスは業者に丸投げ、まさに何でもありの現状を考えた時、日系社会の未来を日系人と一緒に考える派遣会社があってもいいなと考え、現在に至っています。

逆移民を支援する団体へ

最後に、日系社会の未来をどう描くかを考えてみます。ブラジル移住振興会社が日本海外協会連合会とともに統合され、海外移住事業団となり、移民終焉ののち日本海外協会に引き継がれ、今村忠雄氏が理事長をしておられますが、この一般社団を理念と共に引き継ぎ、逆移民を支援する日本版文協にするべく、私の所属する団体を含め4つのNPOが手を挙げています。

文協の理念・目的を、日本に住む日系社会の現状に合わせて改変、温かいコミュニティの創造に向け絆社会を、そして日本人への見える化社会の構築を目指します。そしてもうひとつ、在日ブラジル人のための特別養護老人ホームの建設を企画しており、3つのNPO団体が中心になって進めています。感謝と懺悔の気持ちを持って、長年にわたり深く関わり続けている日系人社会のために余生を捧げたいと考えています。

最近のブラジル政治経済事情

—外務省中南米局提供情報その他より—

ルセーフ大統領の支持率回復傾向

12月14日付各紙は、IBOP社の全国717市の15,414人を対象に実施した世論調査によれば、ルセーフ大統領(PT)が「非常に良い／良い」とする支持率は、デモ発生直後の31%、前回8月の調査時38%より43%に回復し続けているものの、高率であった昨年3月の63%の水準には戻っていない。また、「ルセーフ大統領の残りの任期(2014年末まで)に期待する」と答えたのは、前回の39%から今回は45%に上昇した、と報じている。

若者のショッピングセンターへの集結騒動

昨年末以来、若者たちが、ソーシャルネットワーク(SNS)を通じ、ショッピングセンターに集結する「ホレジーニョ(Rolezinho)」と呼ばれる社会行動が、全国に広まっており、社会問題化している。12月末にサンパウロ市内のショッピングセンターに、郊外に住む貧困層に属する若者を中心に数千人が集まる事象が連続して発生している。

当初はサンパウロ市議会で屋外の音楽をともなう騒音行為を禁ずる法案が可決されたことに対する反発として、若者が繰り出し氣勢を上げたりする娯楽行為であったと見られているが、1月11日にホレジーニョに警察がゴム弾や催涙ガスを用い強硬に対応し、その録画がインターネット上出回ったこと、また裁判所が同行為を禁ずる判決を出したことから反発が強まり、現在では社会運動団体による格差および人種差別是正を訴える政治的性格を有するホレジーニョが全国に拡散しつつある。

Instituto Data Popular(民間調査研究所)のメイレス所長は、1月26日付コレイオ・ブラジリエンセ紙のインタビューに、(1)ショッピングセンターに通う若者たちの圧倒的多数は所得水準Cクラス層で、彼らは新たに中間層に加わった層を親に持つ。(2)本件を読み解く鍵は経済問題以上にインターネットにある。経済的階層にかかわらず、一般的に若者はショッピングセンターで友人と待ち合わせ、SNS上の人気者が待ち合わせを呼びかけることもある。ホレジーニョへ参加する若者たちは政治的な動機をまったく有していないが、その結果は政治的論議を呼ぶことになった。(3)以前ならエリート階級のためのものであった消費スペースに、消費力を付けた他の階層も入り込んで来るようになり、ホレジーニョがその社会的摩擦を明らかにした。彼らの所得増加のペースはエリート層をはるかにしのぎ、彼らは自身の力で生活を向上させたことで楽観的な傾向を持つ一方、依然として不平等に直面している。(4)次期大統領選挙の鍵は、こういった社会層の彼らが握っているといっても過言ではない。彼らは無料の教育やすべての国民に質の高い医療を提供出来る政府を望んでいる。合計1億5,500万人にのぼるこの社会の若者は、両親より良い教育を受けていて、新しい世論形成者となり得る。ボルサ・ファミリア計画の行方、両親の雇用、子どもへの教育政策、女性の社会参画、ブロードバンド計画等、彼らは過去ではなく未来に向けた議論を望んでおり、選挙

の争点を左右するだろう。

政治任用公務員の大幅交替の可能性

1月19日付フォーリャ・デ・サンパウロ紙は、ブラジルにおいて大統領や閣僚が自由に指定できる各省庁の公務員ポスト(いわゆる政治任用)について、2月に予定される閣僚交代により約5,000ポストが大幅に入れ替わる可能性を報じている。ブラジルの公務員制度上、DAS(Direção e Assessoramento Superiores 上級理事および補佐)と呼ばれる役職が存在する。大統領または大臣に指名され、就任のための試験、資質、経験を問われない。同制度はもともと1967年の軍政下での行政改革で、行政を優れた人材で固めるために設立された制度で、現在連邦公務員約53万人のうち2万2,600人、文官公務員のうち26名に1人が政治任用されている。

多くの国で要職を政府の指名とすることで官僚制度をコントロールすることは一般的であるものの、ブラジルの同制度によるポスト数は国際的な平均で突出しており、ブラジルの約3倍の公務員を有する米国でさえ大統領が自由に指名できる行政職数は約千程度、仏においては約500である。専門家からは、ブラジルにおいて一般的に選挙時の支持要請等をめぐる政治的交換条件、あるいは議会での法案の根回しや市町長との政党関係維持などといった政党工作に用いられること、さらに政党の思惑が反映される任命や透明性に欠ける省内の意思決定が行われることで、汚職の一因になっているとの指摘もある。ブラジル政治史上最大の汚職事件といわれるメンサロン事件後の2005年に、ルーラ大統領(当時)により政治任用制限に関する法規制も行われたが、本制度によるポスト数は、特に上級職で増加傾向にある。

今年2月までにルセーフ大統領により実施されると見られている閣僚交代のなかで、退陣が確実視されている大臣が有する政治任用ポスト数は約5,000にのぼる。現在最も多い保健省のDAS職の割合は数字だけみると3.5%に満たないが、州政府長官、秘書官、局長、所長などの戦略的な要職が多く含まれているため、決して見逃せる数字ではない。他方、観光省においては、全職員の44.7%を占めるに至っている。同省はルーラ前大統領が創設し、わずか521名しか職員を有さないが、うち233名がDAS職員である。

W杯時に BRICS 首脳会合

習近平中国国家主席の提案で、BRICS 首脳会合がサッカー ワールドカップ直後にブラジルのフォルタレーザで開催されることになり、4か国首脳が決勝戦を観戦したいとの意思を示したため、ルセーフ大統領は警備体制の強化に神経を尖らせている。また、大統領は大会に向けた公共交通機関の整備、空港の拡張工事等のインフラ事業が遅れていることから、今後公共交通機関に対する不満が高まり、昨年のような大規模デモが再発することを危惧している。

第 29 回

日本特殊陶業 (NGK スパークプラグ) ブラジル事業 55 周年

加藤 三紀彦
＜ブラジル特殊陶業 (有) 社長＞

技術開発からメンテナンスまで

日本特殊陶業のブラジル現地法人、ブラジル特殊陶業 (NGK DO BRASIL LTDA.) は 1959 年 (昭和 34 年) に設立され、今年で 55 周年を迎える当社グループの中でも最も歴史のある海外法人となります。また海外工場の中で唯一、絶縁体精製から金属塑性加工、完成品組み立てまでのスパークプラグを一貫生産できる工場として技術開発や設備メンテナンスを行える体制を確立しています。

極めて現地の情報量の少なかった 50 年以上前に工場進出を決断し、その後も年率 1,000% を越える超ハイパーインフレなど幾多の困難を乗り越え現在の姿を形作られた先人の方々の勇気とご苦労には畏敬の念を禁じ得ません。

ブラジル進出の歴史は、当時海外販路拡大を考えていた本社側に、1956 年クビチェック大統領が就任し自動車国産のための GEIA (自動車工業実行グループ) が設立され、各種優遇策が打ち出されていたブラジルから種々の合併申し入れが持ち込まれたところから始まります。何度も調査団を派遣した結果、三菱系東山企業グループ傘下のモジ製陶 (Porcelanas Mogi das Cruzes S.A.) と提携してスパークプラグを生産することで合意しました。設立当初はまさに何もない状態で、最初の年の 12 月に最初の 2 万個のプラグを組立てましたが、「日本へその報告をするための電報料がなかったことを覚えている。」と立ち上げに従事し、後に伯陶社長、本社副会長となった小林朗氏 (故人) は 30 年史に記しています。



設立後間もないフラビアアーノ工場

その後合併先から資本を買い取り、100% 子会社となるが、市場においてはスパークプラグと言えば米国の「チャンピオン」が代名詞となっており、NGK の知名度は極めて低いものでしたが、予てより念願であった GM (ジェネ



現在のブラジル特殊陶業 (NGK DO BRASIL)
コクエーラ工場全景

ラルモーター) 社への OEM 納入が認められ、それを皮切りにシムカ、ランプレッタ、インターナショナル、ウイリス、DKW、フォルクスワーゲンへと順次、オリジナル及び補修用プラグの納入が開始されました。

1980 年代にはハイパーインフレーションの時代を迎え、多くの外国企業がブラジルからの撤退を余儀なくされる中、本社においても対ブラジル投資に対する懸念や反対の声が出ていましたが、当時の幹部は信念を持ってこの地球の反対側での奮闘ぶりに「男のロマン」を感じ、投資の継続を決めた経緯があります。

当時私は入社間もない駆け出しの経理マン。ブラジルへの設備の現物出資の処理をしながら「またブラジルですか？」と上司に言っていた記憶があります。30 年近く経ってその地に赴くとも思わずに・・・

多くの日系人が働く工場

現在の従業員は約 1,300 人。主力製品のスパークプラグをはじめ自動車用のイグニッションケーブル、独自技術を活かした住宅用小型タイルなどの生産・販売を行っています。スパークプラグは OEM、補修用ともその後も順調に拡大し、ブラジルのみならずアルゼンチン、コロンビア、エクアドルなど南米全体でのシェアを拡大し、トップブランドの地位を確立しています。

会社が位置しているモジダスクルーゼス市 (通称モジ市) というのは、大都市サンパウロの東約 60 km に位置する 450 年の歴史を持つ古い町ですが、一方で日系人が多く住む町として知られています。したがって会社にも多くの日系人 (2 世、3 世、最近では 4 世も) の方が勤めており、日本人出向者と現地社員とのコミュニケーションギャップを埋めてくれています。ブラジルの寛容さと日本的な「和」の精神をうまく融合し、幾多の困難を乗り越えながら長年に亘り会社を支えてきたのは、こうした方々の力に負うところが大きいとあらためて感じています。

今後とも、ますます発展していくであろうブラジルの自動車産業、およびその周辺産業に関わる者として、次なる 60 周年、70 周年、100 周年に向けて一層発展できるように、微力ながら尽力していく所存です。

ヴィニシウス・デ・モラエスの料理レシピ本を味読する

●岸和田 仁（『ブラジル特報』編集委員、在レシーフェ）

外交官にして詩人、シンガーソングライターと八面六臂の文人活動を展開したヴィニシウス・デ・モラエス（1913～80年）。昨年2013年が生誕百周年だったので、記念イベントや追悼ショーなどがブラジル各地で開催され、本屋には評伝やら詩集の復刻版やらが平積みされていたが、この書店での風景は、今年に入っても、まだ変わっていない。（そういえば、年末年始ちょっと覗いてみたリスボンの大手書店でも彼の特集記事を掲載した書評新聞がベストセラー・コーナーに置かれていたから、ポルトガルでも結構読まれているといえよう。）

そんなヴィニシウス讃歌ムードのなか、これまで未発表であった彼の料理レシピ集を主体にまとめた特製本が、昨2013年8月末に刊行された。彼の関連詩やレシピが収録されているだけでなく、そのレシピに基づき現代のシェフたちが丹精込めて仕上げた料理完成品の鮮明写真が付されているので、ヴィニシウス・ファンでなくとも、フツウの食欲を有する者なら誰しも唾液腺が刺激されることになる。

そのタイトルは、『そう、僕は名コックだから』。

これは、1956年、当時最大の週刊誌メディアであった「クルゼイロ」誌の記者に要請された時、その場でサラサラと書いた即興詩「わが自画像」のなかに出てくる一句であり、その詩全体が、この本の巻末に収録されている。

随分と長いので、そのさわりの部分を恣意的に抄訳してみよう。

「一番嫌悪するもの；旅、
異性に言い寄る奴、ファシスト、
人種差別主義者、守銭奴、
女性に野卑な奴。
一番好きなもの：
オンナ、オンナ、オンナ、
（特に僕の奥さんが一番）、
僕の子供たち、アミーゴたち。
家事については結構手伝っている、
そう、僕は名コックなのだから。
（中略）
飲むのが大好きで、
よく飲む（10年前に比べれば
少なくなっているけれど）。
僕の好きな酒は、ウイスキー
水は少なめ、氷は多めに。
ダンスも好きだ。
そんなこんなで
人は、僕をボヘミアンと呼ぶ。
（後略）」

既に円熟詩人となっていた43歳のヴィニシウスが、

走り書きした自伝的メモからは、人生の楽しみ方を熟知した人間活動スペシャリスト、より俗っぽくいえば、食欲も性欲も知識欲も全て全開で生き続けた人生の達人、というイメージが浮かんでくるが、食文化の部分にスポットライトをあてた今回の著書をゆっくり読んだり、写真を楽しんだりしてみよう。

本書は、三部構成になっている。

第一部は、「モラエス家の家庭料理のレシピ」で、各章のサブタイトルは、子供時代、国外にいる時感じる郷愁の味、クリスマス料理、厨房におけるヴィニシウス、だ。第二部は、「外食（といっても孤食はなくて誰かと一緒に）のレシピ」、リオ・デ・ジャネイロ、リオのボヘミアン、ミナス・ジェライス、ロサンゼルス、フランス、バイーア、イタリア、アルゼンチン&ウルグアイ、ポルトガル&チュニジア、となっており、第三部は「私の一番好きな料理レシピ」、女性のレシピ、男性の愛、大いなる愛のために、一輪の花を抱く少女のために、私のアミーゴたち、愛玩動物へ、となっていて、巻末に先ほど抄訳した「わが自画像」が全文おさめられている。

はしがきを寄せているのが、末妹のラエチチア（ちなみにヴィニシウスは男二人、女二人の四人兄弟の二番目）だが、カランボーラ（スターフルーツ）をかじると、祖父の別荘で過ごした1920年代の古き良きリオの風景が思い出される由だ。

そのあとには、ヴィニシウスの食讃歌の文章が続くのだが、「小腹を満たす軽食といえば、いり卵、エビ、スープ、ソース、ストロゴノフだろうか—いや、愛のあとに食べるのもよし。」とか「だから、料理という行為には愛が伴わねばダメだ。」とか、の至言に読者は頬を緩めることになる。

ここで、彼とテーブルを一緒にした面々を列記してみれば、詩人では、ジョアン・カブラル・デ・メロ・ネット、マヌエル・バンデイラ、フェレイラ・グラール、パブロ・ネルーダ、作家・ジャーナリストでは、ジョルジ・アマード、パウロ・メンデス・カンポス、フェルナンド・サビーノ、リジア・ファグンデス・テレス、イルダ・イルスト、オットー・ララ・レゼンデ、音楽関係者では、トム・ジョビン、ピシンギーニャ、バーデン・パウエル、マリア・ベタニア、シコ・ブアルケ、ドリヴァル・カイミ、トキーニョ、ナラ・レオン、クララ・ヌネス、と多士済々だ。

あきれるほど広い交遊の“触媒”となったのが、料理なのだから、食べる行為と友人たちとの会話を楽しむことが“弁証法的に”同時進行するのが、ヴィニシウス流だ。

名コック、ヴィニシウスは、奇をてらった新作クイジーンには傾かず、「オフクロの味」を引き継ぐ、オーソドックスな料理人であった。詩人ヴィニシウスのもう一つの顔、である。

ブラジルの成長痛、サッカーを超える国に

宮本 英威

(日本経済新聞社 米州編集総局 サンパウロ支局長)

サンパウロのパウリスタ大通りはブラジルを代表する目抜き通りだ。大企業のオフィスが軒を連ね、日本企業の現地法人も集積する。歩道には新聞や雑誌を所狭しと並べた路面店が数百メートルごとに顔をのぞかせている。

最近ちょっとした変化があった。様々な大きさのサッカーボールが網にはいつてぶら下がり、おなじみの黄色いユニホームはハンガーでつるされ始めた。店頭はにぎやかになった。ただ、サンパウロの中心部に生活している感じる変化は少ない。

6月のサッカーのワールドカップ(W杯)開幕まですでに4カ月を切っている。ホスト国はブラジル。優勝回数が5回と世界で最も多く、「王様」を有し「王国」とも称される国だ。にもかかわらず、日々の生活レベルでは、巨大スポーツイベントを間近に控えた国という感じがまったくしない。

一方で開幕に向けた不安材料は事欠かない。レベロ・スポーツ相が長らく「2013年内に間に合わせる」と強弁していた開催12都市の競技場。工事は遅れに遅れ、結局去年のうちには完成しなかった。最も早く使うはずの開幕戦の舞台となるサンパウロの競技場の完成は4月までずれ込む。

競技場にたどり着くために必要な交通インフラの整備はもっと深刻だ。有力ニュースサイト「G1」によると、空港や道路など74件の交通インフラ整備事業のうち、18件が中止となり、38件は完成時期が遅れる。北東部



W杯は6月に迫っている(2013年12月、北東部コスタドサウイペで開いた組み合わせ抽選会)

フォルタレザの空港は、帆布を用いた組み立て式の仮設ターミナルで急場をしのぐことになった。

W杯開催が決まったのは2007年10月に遡る。経済は好調で「未来の国」の時代がよいよ来たたと興奮の渦の中にあった。W杯はそんな新生ブラジルを世界にお披露目する絶好の舞台になると思った人々は多かったはずだ。

それから6年強。インフラ設備の建設作業の遅れやトラブルは予想の範囲内だったのかもしれない。心配なのは経済の停滞だろう。鉄鉱石など資源の価格が下がり、靴など製造業は輸入品に押されるばかり、設備投資は低調…… なかなか立ち直りのきっかけがつかめない。2013年まで3年連続で潜在的な成長率を下回る状態が続いた。

複雑で重い税制、度重なる書類申請、乏しいインフラといった「ブラジル コスト」と称される課題は明確なのに、政府は解消には動いてこなかった。ブラジルは代表的な新興国をひとまとめにしたBRICSの一角から、成長資金を海外に依存する経常赤字国をまとめた「フラジャイル・ファイブ(脆弱な5カ国)」の1つに数えられるようになった。

停滞する国の現状に「ノー」を突き付けたのは国民だ。昨年6月には抗議活動は全国で100万人規模を動員。「教師はネイマールよりも価値がある」。サッカーブラジル代表のエースを例にあげて、W杯よりも教育の充実を訴える声は切実だった。

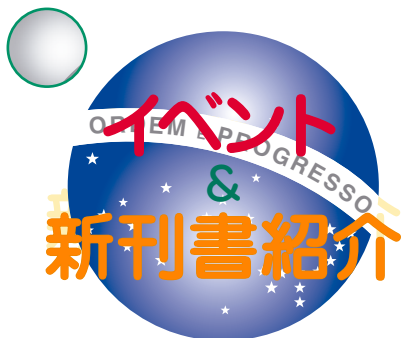
圧倒的多数の参加者は国の問題点を冷静に指摘し、静かに行進していた。有力プロチームがないマナウスやブラジリアに立派な競技場を作っても、使うのはW杯での数試合。それならばもっと先にやることはある。もっともな指摘だった。それだけに、小売店を襲い、自動車販売店に火をつけ、盗難に動いた一部のグループがデモに乗じて暴力を振るったのは残念だった。

かつてのブラジルは貧しい国だった。その国にとってサッカーはすべてで、世界一の称号は国民の憂さを隠した。ペレ氏のように貧しい家庭環境から上り詰め大金を稼ぐさまは皆のあこがれの的だった。

ここ10年の経済成長で、約2億人の国民の趣味は多様化してきた。中間層は4千万人増えて1億人を超えた。1人当たり国内総生産(GDP)は1万1000ドルと、4倍弱に膨らんだ。サッカーはすべてではなくなった。

前回ブラジルがW杯を開いたのは1950年。この64年前の大会の前に、今回決勝の舞台となるリオデジャネイロのマラカナン競技場の建設の是非を巡り、議会は紛糾していたそう。いま抗議活動が起きるのはむしろ当然で、それはブラジルが一歩進んだ国になるための「成長痛」のようなものだ。

ブラジル代表が地元開催で優勝を遂げることは誰もがのぞんでいる。だが、それだけをのぞむような国民でもない。抗議活動は1年前と同じようにきつと起こる。政府がそれにどう対峙するかで現在のブラジルの立ち位置が浮かび上がってくる。



理事会開催

日時：3月24日（月）14：00～

場所：協会会議室

主要議題：平成26年度事業計画書・収支予算書の承認。代表理事および業務執行理事の職務執行状況の報告



日時：5月26日（月）14：00～

場所：協会会議室

主要議題：平成25年度事業報告・計算書類等の承認。定時総会の招集の決定（日時、場所、目的である事項）公益目的支出計画実施完了確認請求書の承認。代表理事および業務執行理事の職務執行状況の報告

梅田新駐ブラジル大使赴任

1月28日付で発令あった梅田新駐ブラジル大使のご赴任に当たり、大前会長以下協会役員が2月末外務省を訪れ、大使にご挨拶しました。

梅田 邦夫（うめだ くにお）

昭和29年3月生 広島県出身

昭和53年3月 京都大学法学部

卒業、同年4月入省

平成12年12月 在中華人民共和国

日本国大使館公使、22年8月

アジア大洋州局南部アジア部長、

24年9月 国際協力局長

☆ イベント ☆

☆第26回ランチョン・ミーティング

日時：2014年3月27日（木）正午～午後2時

講師：古沢 昌之氏（大阪商業大学総合経営学部教授）

演題：「日本の“資産”日系人をどう

経営に取り込むかーバウンダリー・スパーナーとしての日系人活用戦略論」

「日系人」に着目し、日本およびブラジルでの調査結果から日系人をブラジル事業に活かせる貴重な人的資源であり、経営の一翼を担う人材として捉え、どのように活かし、能力付与していけばよいのか、お話をお伺いします。

場所：アークヒルズクラブ（アーク森ビル イーストウイング37階）
東京メトロ南北線「六本木1丁目」または銀座線「溜池山王」下車

参加費：会員5,000円 非会員6,000円（当日会場にて申し受けます）

申込み：先着順50名様まで。食事手配の関係上、必ず事前に協会事務局へ。お申し込み後ご欠席される場合で、3月26日（水）午後5時までにご連絡頂けない場合は、参加費ご負担をお願いいたします。

その他：ドレスコード（男性）ジャケット・ネクタイをご着用下さい。

☆ 新刊書紹介 ☆

☆『「日系人」活用戦略論』 古沢 昌之

副題がブラジル事業展開における「バウンダリー・スパーナー」としての可能性とあり、日本企業がブラジルでの事業展開における競争で優位に立つための貴重な人的資源となりうる日系人の活用策を理論と実証で論述している。

（白桃書房 2013年12月 252頁 3,500円＋税）

☆『上塚司のアマゾン開拓事業』 上塚 芳郎・中野 順夫

アマゾン開拓に奮闘した上塚 司の事績を中心に、日本人入植の経緯、拓植教育施設、植民地運営の曲折、日本人が興したジュート（黄麻）栽培、アマゾニア産業（株）の清算に至るま

でを、多くの資料と関係者の聴取を行って纏めた日本人アマゾン開拓通史。

（天園 2013年11月 288頁 非売品。入手は上塚芳郎氏 Fax 03-5269-7445 メール Mail: muetuka@hij.twmu.ac.jp へ、頒布価格1冊3,000円＋送料340円）

☆『ビジネス用語集 Glossário de Termos de Negócios 日本語／English／Português』・『Doing Deals in Brazil（日本語版）』 PWC

プライスウォーターハウスクーパースのブラジルデスクによるビジネス用語集は、日本語・英語・ポルトガル語とその逆にポルトガル語から牽ける。投資手引きはブラジル投資と課題、経済環境、M&Aから企業投資活動、文化、会計原則および監査要求、税務、労働力と人件費、環境問題までを解説。

（PWC 2013年 667頁・105頁 非売品。問い合わせは、kazue.kataoka@jp.pwc.com または電話03-3546-8508 へ。同社では『会計用語集 一日英葡語』も出している。）

☆『ドン・カズムッホ』マシャード・ジ・アシス著 武田千香訳

語り手の男が亡妻と親友の不義を確信して、ついには妻子ともどもスイスに追いやるまでの経緯を綴った、恋と疑惑の物語。ブラジルの文豪の代表作だが、はたして妻は姦通をはたらいたのか、それとも冤罪なのか、偏屈卿（ドン・カズムッホ）と呼ばれた語り手の嫉妬と妄想なのか。この作品には画期的な文学的技法の面白さがあると、訳者は解説で指摘している。

（光文社（古典新訳文庫）2014年2月 556頁 1,400円＋税）

☆『るるぶ情報板 ブラジル・アルゼンチン』

イグアスの滝、レンソイス、アマゾン、リオデジャネイロ、サンパウロ、サルヴァドールの案内にブラジル料理、土産、リオのカーニバルなど、レストラン、土産、お薦めスポットを、カラーで沢山の情報・写真・資料満載のビジュアルな雑誌風旅行ガイド。（JTBパブリッシング 2014年1月 95頁 1,500円＋税）